ごあいさつ

相愛大学人間発達研究所所長　塩見　邦雄

2008年4月1日，相愛大学の三番目の研究・教育機関として，人間発達研究所が設置されました。研究所名は，2006年に開設された人間発達学部の名に由来していますが，その意味どおり，人間発達学およびその隣接領域に関する学術的研究や実践活動を推進して，教育の向上や子どもたちの発達支援に資するとともに，学術文化の発展に寄与することを目的としています。

人間発達研究所は，今後，その主要テーマである「人間発達」の諸側面の研究・教育活動を行なっていかなければなりません。その内のごく一部を例示すると，子どもから高齢者を対象とした栄養に関わる研究活動，食育，そして子どもの心身の発達に関わる基礎研究や子どもの心身のケアを支援する発達相談などがそうです。

本年度の活動ですが，11月2日（日曜日）に研究所の第1回公開講演会を開催しました。講師として，東京学芸大学教授で，日本LD学会会長の上野一彦先生をお呼びしました。先生は，特別支援教育の日本の権威で，今回は「今始まった特別支援教育の課題」というタイトルで講演していただきました。大学や小中高の先生，養護学校の先生たちが出席されて，熱心に先生のご講演を拝聴されました。ここに掲載したのは，その時の先生の演の逐語録をまとめたものです。「日本で2007年からスタートした特別支援教育は，これまでの視覚・聴覚・運動障害，知的障害に加えて“発達障害”と呼ばれる子どもたちを巻き込んで，特殊教育が数パーセントだった時代から，今度は1割，10パーセントを超える子どもへの支援教育へ変わってきた」というお話から特別支援に関わる重要なことをわかりやすくお話していただきました。そして，先生のご講演の最後での「通級による指導は，単に子どもの居場所というオアシスではなくて，そこで一つ一つ力を蓄えてみんなの中に戻っていける，カタパルト（発射台）にしてほしい。」というお話，そして，最後に言われた言葉，「私は，障害というのは個性であると言いたい。しかしただの個性ではなくて　それはまだまだ理解とサポートを必要とする個性だということです」は，私たちが真摯に，そして大切に受けとめていかなければならない言葉だと思いました。

今年度は開所1年目ということもあり，充分な活動ができませんでしたが，本誌を「人間発達学研究」のプレ創刊号とし，次年度からは各研究員の研究成果も発表する場として，更に充実した内容にし，研究会や公開講演会などを通して，大学内外の多くの方々とも意見交換を行っていきたいと思っています。

そして，最後に，本研究所の今年度の活動は，人間発達学部のすべての先生方のご支援があってできたものであることを記しておきます。